

聖書：コリント人への手紙第一 2：10～16

説教題：キリストの心を持つ

日時：2022年2月13日（朝拝）

この世の価値観を教会の中に持ち込んで分裂と争いを引き起こしていたコリント人たちに、パウロはこの世の知恵と神の知恵はどんなに異なるかについて述べています。特にその違いがはっきり現れるのはイエス・キリストの十字架に対する見方です。この世の知恵はキリストの十字架を愚かと判断します。バカバカしい話と考え、これを蔑み、できる限り関わらないようにしようとします。しかし何と神は人間の裏をかくようにして、あのキリストの十字架を通して罪人たちの救いを成し遂げようと計画されました。それは前回の7節にありましたように、世界の始まる前から神の内に秘められた計画であり、またそれは信じる者たちを最後に栄光に導くことを目的とするものでした。まさかあの十字架の木にかけられたキリストに神の唯一の救いする方法があるなどとは、この世の知恵が全く思いつきもしなかったことでした。ですから前回の9節にこうありました。「目が見たことのないもの、耳が聞いたことのないもの、人の心に思い浮かんだことがないものを、神は、神を愛する者たちに備えてくださった。」

さて今日のテーマは、この神の知恵を私たちはどうやって知るに至ったのかということ。神の知恵は人間の思いをはるかに超えたものです。それをどうやってクリスチャンは認めることができたのか。答えは一言で言えば「御霊によって」です。今日の箇所にはクリスチャンに対する御霊の働きが、大きく分けて三つ書いてあります。以下順番に見て行きます。

まず一つ目は「御霊による啓示」です。ここで「啓示」と訳されている言葉の意味は「覆いを外す」というものです。それまで隠されていたもののカバーを取って、その内側にあるものが見えるようにすることです。これは7節の「隠された神の知恵」と対の関係にあるものと言えます。神の恵みがなければ神の知恵は私たちに隠された状態にあります。しかし御霊によって覆いを外されると、何とそこに神の知恵があることが分かるようになる。キリストの十字架に神の知恵が豊かに示されていることが分かる。10節後半に「御霊はすべてのことを、神の深みさえも探られるからです」とあります。「神の深み」という言葉で思い起こすのは、ローマ人への手紙 11章 33節

の次の言葉ではないでしょうか。「ああ、神の知恵と知識の富は、なんと深いことでしょう。神のさばきはなんと知り尽くしがたく、神の道はなんと極めがたいことでしょう。」パウロは神の知恵と知識は何と深いことか！また何と測り知れないものか！と感嘆の声を上げています。御霊はその神の深みを十分に知っています。その説明が11節です。人間も自分の心の思いや心に描く計画などは本人の霊、すなわち自分自身こそが知っています。他の人は外側からその人を見て、その心にあることを推測することはできますが、当たっている保証はありませんし、またその深さまでは分かりません。その人の心の内にあることは、その人本人しか知り得ないものです。それは神についても同じだと言われています。神のことは神のみがご存知です。神ご自身である神の霊、御霊なる神こそ十分に良く知っています。これを踏まえた上で12節で、私たちはこの「神からの霊を受けた」と言われています。この御霊が私たちの内に住んでおられるので、私たちは神の御霊によって神の御思い、神の知恵を十二分に教えていただくことができるのです。12節の「神が私たちに恵みとして与えてくださったもの」とは、9節の、神が「神を愛する者たちに備えてくださったもの」を指すでしょう。十字架につけられたキリストを通して神が与えてくださる豊かな祝福のことです。もちろん私たちは御霊を頂いたからと言って一度で全部が分かるようになるわけではありません。神がその知恵により、与えてくださった祝福はとてつもなく大きなものです。その一部分を知っただけで思わず感嘆の声を上げざるを得ないものです。あのパウロでさえ、「ああ、神の知恵と知識の富は、なんと深いことでしょう。神のさばきはなんと知り尽くしがたく、神の道はなんと極めがたいことでしょう。」と叫ばざるを得ませんでした。私たちは御霊によって、この神の深みを少しずつ知るように導かれるのです。私たちの信仰生活はこの御霊の働きに全面的に負っています。

御霊が与えてくださる2つ目の働きは私たちに語ることばを与えるというものです。御霊は私たちに悟りを与えるだけでなく、私たちに語らせる霊でもあります。13節に「それについて語るのに」と始まり、「私たちは人間の知恵によって教えられたことばではなく」とあります。これはすでに見た2章1節や4節に対応しています。パウロは2章1節でコリント宣教を振り返り、その時、「私は、すぐれたことばや知恵を用いて」語ることをしなかったと言いました。また4節に「私のことばと私の宣教は、説得力のある知恵のことばによるものではなく」と言っていました。つまりコリント人たちが高く評価した当時のギリシャ世界でもてはやされた雄弁術、あるいは巧みな話術を用いることをしなかった。そうではなく、「御霊に教えられたことばを用い

ます」と13節で言います。これはどんな言葉でしょうか。これは御霊からテレパシーのようにして伝授される特殊な言葉とか神秘的な言葉という意味ではありません。これは御霊に教えられたままの言葉ということです。一つ目のポイントで見ましたように、御霊に教えられて私たちはキリストの十字架において神の知恵が示されていることを知るように導かれました。そのことを今や悟り、その救いを受け取った人としての自然な言葉ということです。その救いを体験し、味わっている人の言葉ということです。その言葉は世の雄弁術に比べたら世からの評価は低いかもしれませんが。世の人々の耳にアピールするものではないかもしれません。しかしこの世の人間の技法、テクニックにより頼まず、御霊によってキリストの素晴らしさ、神の知恵の素晴らしさを味わっている者として、自分の生の言葉で語るのです。それは御霊が与えてくださる言葉、また御霊が語らせてくださる言葉と言えます。もちろん良い話し方を研究するのは悪いことではありませんし、ある意味で大切なことでしょうけれども、それにより頼むことはしないのです。御霊に教えられて自分が感動した通り、その言葉をもって語るのです。

しかし私たちがそのように話したとしても、です。14節に「生まれながらの人間は、神の御霊に属することを受け入れません」とあります。生まれながらの人間とは、この世に生まれた時の状態のままで、御霊による新しい誕生、すなわち新生の恵みにあずかっていない人々のことです。その人々はいくら御霊のことばによって御霊のことが説明されても受け入れない。なぜならそれらはその人には愚かだからです。1章18節や23節などで見て来ましたように、この世の人々にとってキリストの十字架は愚かな話、くだらない話だからです。そのため、「理解することができない」。14節最後に「御霊に属することは御霊によって判断するものだからです」とあります。御霊の導きがなければ、いくら目の前で御霊のことが話されても通じないのです。ですから私たちがうまく話せれば相手は信じるようになるというわけではありません。人間の話術や知恵によって相手を回心に導けるわけではありません。私たちはみことばを忠実に宣べ伝えること、すなわち御霊のことばによって御霊のことを説明することが必要ですが、同時に神が御霊を送って相手の人の心を変えてくださるように祈らなければならないということになります。御霊がその人を新しく誕生させ、御霊のことが分かるようにしてくださることこそ、すべての鍵を握ることと言えます。

今日見る三つ目のことは御霊を受けている人にはどういう結果が現れるかという

ことについてです。15～16 節には御霊を受けている人と生まれながらの人が対照的に述べられています。まず 15 節前半に「御霊を受けている人はすべてのことを判断します」とあります。「すべてのこと」とは、これまでの文脈から考えれば、御霊に属するすべてのこと、あるいは神の知恵に関することと言えます。そのことに関する理解力を与えられた者として、その光に従って様々なことを判断できる者とされる。少し分かりにくいのは、その後の言葉です。「その人自身はだれによっても判断されません」ありますが、これはどういう意味でしょうか。この意味は、その人自身は（すなわち御霊を受けている人は）そうではない他の人たちによっては判断されない、すなわち理解されないという意味であるようです。先の 14 節では、生まれながらの人間は神の御霊に属することを理解できないと言われましたが、そればかりでなく、「御霊を受けている人」のことも理解できない、判断できないということです。これはある意味で当然のことと言えます。御霊のことが理解できないのですから、御霊によって歩んでいる人たちのことも理解できない。色々な評価を下すかもしれません。愚かであると言ひ、蔑むかもしれません。しかしもともと判断できないのです。ですから私たちは一般の人々から誤解されたり、理解してもらえない対応をされても、それはある意味で当然のことだ、理にかなったことだと思わなければなりません。

これは聖書の他の御言葉が述べていることでもあるとして、16 節前半で旧約聖書が引用されています。「だれが主の心を知り、主に助言するというのですか。」これはイザヤ書 40 章 13 節からの引用で、その前後の節を参照いただくと、主の創造の偉大さが述べられていることが分かります。40 章 12 節：「だれが手のひらで水を量り、手の幅で天を測り、地のちりを升に盛り、山々を天秤で量ったのか。もろもろの丘を秤で。」これに続いてここで引用されているイザヤ書のことばがあります。とするとこの意味はどうなるでしょう。だれが主の心を知り、主に助言するというのか。そんな人は一人もいない！というのが答えです。神の知恵は人間の思いにはるかに勝っており、人間の力では神のことは理解できません。ですから前の 15 節後半で言われたように、生まれながらの人間は御霊を受けている人を理解できないということになるわけです。それは違う次元の話であり、捉えることができないのです。

しかし！と最後の 16 節後半は始まります。「しかし、私たちはキリストの心を持っています。」本来、人間は神のことは悟り得ないのですが、しかし私たちは御霊を受けたことにより、神の思い、神の知恵を知る者とされました。ここで注目すべきは、

パウロが「しかし、私たちはキリストの心を持っています」と言っていることです。16節前半では「だれが主の心を知り、主に助言するというのですか。」という旧約聖書の言葉が引用されたのですから、それを受けてそのまま、「私たちは主の心を持っています」と言っても良かったはずですが、あるいは旧約聖書で「主」は神を指しているから、「私たちは神の心を持っています」と言っても良かったはず。なのにパウロは「キリストの心」と言いました。ここに彼のメッセージがあると考えられます。この手紙でここまで「キリスト」という言葉は、特に十字架との関係で繰り返し述べられて来ました。ですからパウロがここで言う「キリストの心」とは、十字架につけられたキリストと切り離して考えることはできません。御霊は神の知恵を私たちに示す際、十字架につけられたキリストにスポットライトを当てますが、御霊はそのことを通して、そのキリストの心を私たちが持つようにと導くのです。この「キリストの心」とはもっと具体的にどういう心なのでしょう。それについての良い注解はピリピ人への手紙2章2～5節にあります。「あなたがたは同じ思いとなり、同じ愛の心を持ち、心を合わせ、思いを一つにして、私の喜びを満たしてください。何事も利己的な思いや虚栄からするのではなく、へりくだって、互いに人を自分よりすぐれた者と思いません。それぞれ、自分のことだけでなく、ほかの人のことも顧みなさい。キリスト・イエスのうちにあるこの思いを、あなたがたの間でも抱きなさい。」ここにキリストの心、キリストの思いとは、へりくだって互いに人を自分よりもすぐれた者と思うこと、自分のことだけでなく、他の人のことも顧みることであると言われています。そしてこの後で、キリストがいかにご自分を低くして十字架の死にまで従われたかが言われます。まさにこれこそコリント教会に欠けていたことだったのではないのでしょうか。彼らは自らを低くして互いに仕え合うどころか、反対に自己主張していました。次回見る3章3～4節には、彼らの間に「ねたみや争い」があったこと、「私はパウロにつく」あるいは「私はアポロに」と言っていたことが改めて述べられます。それぞれがより高い地位と名誉を求めて、分派活動、党派的行動に躍起になっていました。これは御霊を受けている人のあるべき状態からは大いに外れています。クリスチャンとして矛盾した状態にあります。

御霊を受けている人とは、自分はより優れた知識や見解を持っていると高ぶり、誰かと争い合う人、またそれをあおる人ではありません。また前回6節に出て来た「成熟した人」とは、優越意識を持ち、他者を見下す人ではありません。御霊を受けている人、また成熟した人とは、十字架につけられたキリストにおける神の知恵を知る者

とされ、十字架の素晴らしさを知り、私たちのために十字架にまで進んでくださったキリストに感謝し、キリストのみを誇る人、また自らもキリストに倣い、キリストの心を持って歩む人です。そういう人たちの間では1章10節で見た次の歩みが導かれるでしょう。「兄弟たち、私たちの主イエス・キリストの名によって、あなたがたにお願いします。どうか皆が語ることを一つにして、仲間割れせず、同じ心、同じ考えで一致してください。」 御霊を受けている人とは、十字架につけられたキリストについて良く知り、これについて語る者となるばかりでなく、キリストの心を持つ人ともなるという今日のみことばを心に留め、この光の下で自らを改めて吟味・点検する者でありたいと思います。そして御霊によってこれからもこれらの点において益々正しく成長させていただく者たちでありますように。自らを持ち上げ、自己主張し、争いを巻き起こす者ではなく、むしろキリストの心をもって進んで自らを低くし、他者の益のために、また教会を建て上げるために仕え、そうして神が用意くださっている最後の栄光の状態へ至らせていただく主の教会の歩みへ導かれて行きたいと思います。